Osaka Gakuin University Repository

Title	西欧精神の血脈 －G・グリーンの『キホーテ猊下』－ The consanguinity of Western traditional faith －Graham Greene's *Monsignor Quixote*－
Author(s)	平松　良康（Kazuyasu Hiramatsu）
Citation	大阪学院大学　外国語論集（OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES），第 85 号：21-44
Issue Date	2023.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大阪学院大学 外国語論集
第85号　2023年6月

西欧精神の血脈
―G・グリーンの『キホーテ猊下』―

平　松　良　康

G・グリーンは弁証法的な懐疑家である。西欧の懐疑主義に対する彼の理解と共感の深さ、神秘主義の伝統への彼の情熱的な敬意の流露を以下、晩年の作品を通して跡付けて行きたい。G・オーウェルは彼が「過激な保守派」、「ありふれたカトリックの反動主義者」などではなく、「微かに共産党の傾向を持つ穏健な左派」であり、「カトリックで最初の我らの同調者、英国には居ないけれどもフランス等に居る」(Vol. 4, 558) 類の作家だと書いた。的確な評言だが、そのグリーンの複雑な特徴を端的に示して居るのが、晩年の痛快な小説『キホーテ猊下』(1983) である。無論、これはセルバンテス作『ドン・キホーテ』の深遠な現代版パロディーに当り、フランコ総統死後のスペインに於て、カトリックの田舎司祭キホーテと共産主義者の元市長サンチョとの奇妙な旅と対話とが、主筋を織り成して居る。

原作『ドン・キホーテ』の主従の遍歴に劣らず、その主役二人の会話と行動とは滑稽で刺激的なのだが、グリーンは彼のサンチョをキホーテ神父以上の知識人に仕立てた。それ故、両者は互角に、いや度々従者が優勢に議論を展開し、作中にマルクスの『共産党宣言』は勿論、神父の愛読書として数多の聖人の著述や、哲学者への言及が驚く程現れる。宛らカトリックの教義とマルクス主義思想との論争を足早に辿る、西欧精神史の概要の様であり、娯楽小説が好む主題の範囲を遥かに超えて居る。M・ロベールは、セルバンテスの小説から「一つの神学便覧の印象」(61) を受けると書いたが、グリーンのこの小説にもその言葉は当て嵌まる。然も、哲学者のウナムノやデカルトに関しても言及さ

れるから、西欧の合理主義や懐疑主義の伝統に疎い日本の読者には、難解な作品なのである。

だが、西欧精神の血脈の面倒な講釈を抜きにしても、読者は主人公の冒険を心底楽しみ、彼らに間々共感させられる、左様な奥深い滑稽譚としてこの小説は成功して居る。それは身近な愛と死とに関する真摯な疑問がこの小説に貫徹して居るからに他ならない。宗教と政治との意匠に紛れては居ても、その愛と死とを巡り先人が繰り返した自問自答に注意を向けねばならない。愛の至難と死の苦悶とが自己の運命に圧し掛かり、この葛藤を解消する道は絶望的に見出せないが、先人を真似び自らの苦悩を引き受け、決然と歴遊する二人の姿は美しい。現代の「憂え顔の騎士」は、先祖の遍歴の騎士程自信に満ちては居ないが、それでも西欧の伝統精神に孜々として殉じた多くの聖人を模して奮闘する、剛毅な勇者たる事に変り無いからである。

愛と死の主題は、第一部第一章「キホーテ神父は如何にして猊下となりしか」に於いて、イタリア人司教との会話の中で早速暗示される。この司教が難儀して居た所を助けた所為で、キホーテ神父は不本意にも猊下に推挙される事になる。孤独な神父は古びた愛車をロシナンテと呼び慈しみ、その行末を案じて、持ち馬の幸福の比喩を以て人間ならざる物への愛の正当性、信仰上の可否を司教に尋ねる。司教は「馬の良き死なるものがどの様な意味かは解らないが」と断り、人間の死に就いて返答する。「人間にとり良き死とは、神との交りの内に、永遠の約束の中での死を意味します」(19) と。これはこの小説の結尾に就て、重要な意義を持つ反語的予言である。人間への愛を感得出来ずに悩む神父の、挙句教区司教から聖餐の司式を禁じられ、逃亡犯として自動車事故により不慮の死を遂げる末路悲惨など評価せぬかの如くに聞える。その最期は神との親交を断たれ、永遠の約束も拒まれた無用の司祭の悪しき死に様に過ぎぬ様にも見える。そして、この大団円は原作『ドン・キホーテ』最終章の臨終場面とは対照的に、教会への痛烈な風刺として描かれる。原作の騎士は正気を取り戻し、善人として教会に受け入れられ、告解の後安らかに、先の司教の説

く「良き死」を受容する事になるからである。

けれども、死の良し悪しは、畢竟人間の相対的判断ではないか、とグリーンは述べたいのだ。この小説の題詞にグリーンは、『ハムレット』第二幕二場の主役の台詞、「もともと、良い悪いは當人の考へひとつ、どうにでもなるものさ。」（シェイクスピア 66）を揚げた。そして、人間と神とでは無論、善悪の「判断は同一ではない」(Greene 57)。当のキホーテ神父の認識は扨置き、亡くなる神父を見守る人々の反応も様々だ。事故で昏睡した神父は、収容された修道院の祭壇で、夢遊病の儘、幻覚のミサを進行し、相棒のサンチョに聖体を授けて幸福に死んで行く。この臨終間際の無意識の行為を目の当りにして、手当を尽した修道院のレオポルド神父は、教会組織とは見解を異にする。キホーテ神父が最愛の友人の為にした事は、イエスの言葉、「その友のために己の生命を棄つる」「より大いなる愛はなし」（ヨハネ伝第15章13節）に忠実な行動だと見做し、旅路を共にした主従に満腔の敬意を表するのである。因みに、ヨハネ伝はキホーテ神父の愛誦する詩的な福音であり、「地獄への言及が一回も無い」(58) 点が、地獄なる語句の頻出する恐怖の福音マタイ伝とは異なり神父に好まれる。

一方、サンチョはロシナンテの残骸と神父の亡骸とを前にして、唯物論者らしく割切り気持ちを整理しようとするが、恐しい不安が過る。「金属の塊と粉々に砕け散る頭脳。一種凶暴なまでに市長はその類似性に拘り、確実性の為に苦闘して居た。人間とて機械なのだと。だが、キホーテ神父はこの機械に愛情を感じて居た。」(255) 金属片も死体も物質に過ぎないと、キホーテ神父が死んだ今、もはや従者ならぬ共産主義者の友人は、己を納得させようとする。だが、真実人間が機械の様に確かで、非合理な所が無いのなら、友情などの曖昧で不確かなものに支配される道理がない。事実、幻の聖餐式の際サンチョは自己の信条よりも友人への愛を優先し、「神父さんに安らぎを得させる為ならどんな事でも、何でも」(250) すると決意し、捨てた信仰に復したかの如く聖体拝領の為に跪いたではないか。真に肉体の終焉が「最後の別れと最終的な沈

黙」であるなら、「市長がキホーテ神父に感じ始めて居た様な愛」は、どうして「今も生きて居り成長して居る様に感じられるのか」。グリーンはこの小説を次の様に結ぶ。「市長は或る種の恐れを懐きながら不思議に感じた。どれ位長い間、自分のこの愛は継続し得るのか、そして、どんな終着に到るのかと。」(256) 元市長が放蕩息子よろしく信仰に立ち返り、キホーテ神父が家政婦に述べた様に、「キリスト教徒には、永遠の別れなどあり得ない」(197) から神父と懐かしい再会を果す「終着に到るのか」、それは解らない。明白なのは、頑固な合理主義の唯物論者の心をも動かす強力な愛の不可思議に、元市長が動揺して居る事である。グリーンは自分の洗礼名として懐疑家の「デドモと称ふるトマス」(ヨハネ伝第20章24節) を選んだが、この結末には懐疑家の作者らしい未決の強迫観念が感じ取れる。

現実に、友愛の「継続」と「終着」への「恐れ」に関して元市長と同様の心理を経験した著名人が居た。嘗て共産主義を信奉した作家の M・マゲッリッジである。マゲッリッジがサンチョだとすれば、キホーテ神父に当るのは、懐疑に悩む者の守護聖女マザー・テレサ（コルカタの聖テレサ）となる。マゲッリッジは英国 BBC の為にマザー・テレサに密着したドキュメンタリー番組『すばらしいことを神さまのために』の司会進行を務めた。この才人は、オーウェルの言葉に依ると「嘗てのコミュニストであり、覚醒のお決まりの過程を経て共産主義に幻滅する様にな」り、「英国嫌悪が突然猛烈に親英国派になる」「かなりあり触れた」(Vol. 3, 422) 系統に属する作家である。オーウェルの見る所、マゲッリッジの或る「著作の要旨は伝道之書からの二つの文章に含まれ」て居て、それは「空の空なるかな」と「神を畏れよ」とであるが、彼は自身の信仰に就いては示さず、キリスト教が「人間の頭から消失しつつある事を当然の如く見做し」、「戦争に継ぐ戦争、革命と反革命、ヒトラーの如き支配者と超ヒトラーの輩」などの暗い未来の予想を「楽しんで居るのではないかと怪しむ」(Vol. 2, 31) と評さざるを得ない。マゲッリッジはキリスト教に対する認識と曖昧な態度、皮肉な批評精神、能弁多才の類稀な資質の点で、元市長の

サンチョと酷似して居る。サンチョは若い頃、神父を目指して一流大学で神学を学ぶ途中で棄教した、徹底的な合理主義の冷笑的理論派である事を想起すべきだ。マゲッリッジならではの犀利な評言を『マザーテレサ　すばらしいことを神さまのために』から抜粋しよう。

> マザー・テレサが教会の現状を見る見方をどうにも受け入れることができないでいるわたしのちゅうちょや疑問、死すべき人間の構成している位階制や司祭職が作りもし、傷つけもし、維持もし、崩壊もさせるそういう制度ではないものとして教会を見ることができないでいるわたしのことは、マザー・テレサにはわかってもらえない。(68)

> キリスト教は、･･･論理の結論であるよりは体験であり、イデオロギーのようなものよりは生き方である。(152)

> 苦しみとか死は、機械がぶっこわれたというのとは違う。創造主と人間とのつながりのいつまでもつづく劇の一部なのである。「正当化できない侵犯」やとんでもないことなのではなく、われわれ人間の条件をあらわし、価値を高めるものなのである。おごる人間の頭が愚かにも信じているように、もしも苦しみをなくし、死すべき人間の一生から死をもなくすことができたとしたなら、人の一生の価値が高められるどころか、かえって低められて、生きるかいのない、あまりにも無意味な、平凡なものになってしまう。(156-57)

カトリックの「位階制や司祭職」の制度への不信、人間を機械と見做す唯物主義への疑問、そして「論理の結論よりは体験」を、「イデオロギー」よりは「生き方」を重視する立場に、サンチョとの類似が見出せる。他方、マザー・テレサは、キホーテ神父の如くリジュの聖テレーズを敬愛して居たが、その死

後に刊行された書簡『来て、わたしの光になりなさい！』の中で、これ又キホーテ神父と同様の、神に対する深刻な懐疑と不信、苦悩の歳月を克明に記録して居た。成程オーウェルが切り捨てた様に、「聖なる罪人の礼讃は下らない」(Vol. 4, 499) かも知れないが、グリーンならこの手紙に多大な関心を寄せたのではないか。カトリックの有名な修道女と元共産主義者の作家との間の奇妙な友情、並びに前者の深い懐疑や絶望と後者の恐れや不安とに関連して、我々には意外な「聖なる罪人」なる系譜の実例を紹介した。2007年8月23日付け『タイム』誌は、「マザー・テレサの信仰の危機」と題する記事を掲載し、その「空虚と無信仰と愛の不在と熱情の不在」(Van Biema 4) に就いて、詳しく報じて居る。

オーウェルの『カタロニア讃歌』に明白な様に、スペイン内戦の勃発により国内の分裂は激化し、労働者は教会を「搾取、貧困、飢饉、戦争と疫病」(Vol.1, 423) の容認派と見て憎悪して居た。有能な官吏や富裕な成功者の印象故か、オプス・デイ会員に対するグリーンの反感や皮肉が彼の小説からは感じ取れるのだが、この運動の創始者ホセマリア神父はタクシー運転手に、内戦中に死んで居たらよいのに、と面詰された由。しかく『キホーテ猊下』の神父は、共産主義者サンチョには恨み骨髄の仇敵である。度々激しく対立するが、共に旅する道中で次々と騒動を巻き起こし、治安警備隊に追跡される羽目に陥りながら、「相互に理解」しようと努め、堅い友情で結ばれて行く。キホーテ神父は最初、この道連れを原作のサンチョの如き「単純な男か鋭敏な男か」(続編二 114)、懐疑的な教条主義者かと怪しんで居たが、やがて「もはや従士どころかわしの血を引く倅も同然」(続編三 295) とて信頼する様になる。出立の際に神父が告げた「大きな裂け目が我々を分け隔てて居る」(Greene 37) との疑問は解消し、「二人には何かしら共通点がある」(44) から、相手の信条に素朴な疑問を投げ掛けても「敵意を懐かずに議論する事」(48) も出来た。サンチョが好む「同志」の呼称を拒絶して「友よ」と呼び掛ける神父には、共産主義であれカトリックであれ、如何なる組織でも、同じ思想内部の抗争から凄

まじい粛清が為されて来た事が、よく理解出来て居た。キホーテ神父を「迫害する」のは同じ教区の司教と有能な秘書なのだし、この神父の愛読書の多くが、カトリックの同じ会派の兄弟姉妹から非難や弾圧や拷問を受けた聖人達の作品である。サンチョはサンチョで、スペイン内戦時に、オーウェル同様ソ連の卑劣な裏切りを経験したから、大陸の「同志」を一切信用して居ない。詰り、「二人に共通する何か」、イデオロギーの対立や敵意を乗り越えるのに必要なものとは、「同志」や「兄弟姉妹」には希薄だが、「友達」同士には豊かに存在する相手への誠実である。

それはL・トリリングが *Sincerity and Authenticity* の中で分析した、他者への道義的義務を重んずる態度ではないか。この評論は他者への道義的義務と自己の把握した真理とを対比して、どちらに重きを置くかを文学史的に博引傍証した批評である。トリリングの論じた「誠実」とは、「自己自身の自我に忠実たる事により、どんな人間に対しても不実になるのは避ける」(5) との含意であり、その「個人的な在り方は、最も厳格な努力無くしては達成し得ぬ」(6) ものである。それに対して「ほんもの」の自負は、「社会環境に関する遥かに受け容れ難い冷たい見方」(11) を含み、「ほんものたる事は、究極の孤絶と、それが厚顔にも齎すとされる権力とを通して達成される」(171) との矯激な信念を包摂して居る。即ち、他者への接し方が対蹠的であり、前者が敵に対しても忍耐や寛容の「厳格な努力」を要求するのに比べ、後者は仲間に対してすら容赦無い制裁を課して自己絶対化の傲慢を助長する。前者は道義と内省を齎し、後者は正義と粛清を求める。それ故、キホーテ神父とサンチョとは同様の懐疑を懐いて「自分自身と苦闘するのみ」(59) だが、教区司教と秘書や大陸の共産主義者らは、正義を盾に精神病院や強制収容所の「恐怖による支配」(74) を望む。この点、司教秘書のヘレラ神父が神の正義を強調し、「地獄への言及が十五回もある」「マタイ伝」(58) を好む潔癖な人物であるのは、頗る象徴的である。

「ほんもの」の正義を所有したと自惚れた人間は、他者への誠実な義務を軽

視する。トリリングが『誠実とほんもの』の結論で辛辣に批判した如く、その様な偽物がキリストの様に「仲裁の手間をかけ、自らを犠牲にし、律法博士を説得したり、説教をしたりして、弟子を持ち、結婚式や葬式に出向いて、大事を始め、定められた時に『事畢りぬ』と語る」(172)、そんな骨折りを引き受けないのは、理の当然である。他方、『キホーテ猊下』中に登場する大勢の宗教家や思想家然り、後のマザーテレサ然りだが、イエスの刻苦を模倣し原点に立ち返らんとする実務に精力的な行動家は、身内からの激しい抵抗や反発を受け弾圧される。その「殉教者」の著作こそがキホーテ神父の「騎士物語」となり、サンチョの場合も、マルクス主義以上にスペインの懐疑的な哲学者ウナムノの思想が、彼の人生を決定する聖典となる。

キホーテ神父の「最も信頼する古い書物」(40) は、十字架の聖ヨハネ、聖テレサ、サールの聖フランシスの諸作品と福音書である。これらの書物は旅の友として愛車ロシナンテのトランクに大切に収納される。十五回程も生命を危険に曝されたサンチャゴ・デ・キューバの前大司教アントニオ・クラレットの名も、サンチョとの会話の最中に想起される。アヴィラの聖テレサに就いては、聖遺物の指と大元帥フランコとの関係 (89) が話題に上り、一時旅の目的地となる話もある。「キホーテ神父が最も価値を置いた古書の一冊」(102) がアウグスティヌスの『神の国』である。キホーテ神父と司教との関係が険悪化した際に、心を慰めてくれた少女「マーティン」(104) とは、リジュの聖テレーズの事だ。神父の愛する聖テレーズとサンチョの前の恋人と、「死んだ二人の女性が両名と一緒に旅を続けて居るかの様」(105) だと、グリーンは書いた。虜囚の身となる神父は、「神学生時代に時々慰藉を見出して居た」(180) 聖アウグスティヌスの『告白録』と、静寂主義の異端かと疑問視されたイエズス会のコサード神父の『霊的書簡』を取り出して心を落ち着かせる。トラピスト修道院で保護されて亡くなるキホーテ神父に共感出来るのは、デカルト研究の末に修道士となるレオポルド神父なのであり、疑惑の目を向けるのが「イグナチオ・ロヨラの生涯と作品とに関しては最高権威」(235) であるアメリカ人教授

である。逃避行の間、サンチョとの会話に触発され、これら聖人、哲学者の言葉がキホーテ神父の脳中を去来する。

興味深い事に、十字架の聖ヨハネとサールの聖フランシスとに関してT・S・エリオットが「パスカルのパンセ」の中で、パスカルを推奨する前に次の様に説明した。「十字架の聖ヨハネの様な偉大な神秘家は、主に確固とした目的を持つ読者に向いて居る。サールの聖フランシスの様な信心深い作家は、主に既に神の愛を意識的に熱望して居る読者に向き、それに偉大な神学者は神学に関心の有る読者に相応しい。」(163) エリオットの薦めに依れば、パスカルこそキホーテ神父に一番相応しいが、職業柄、彼が聖フランシスを熟読した事に不思議は無い。だが、神父がこの聖人達の本を「よく耽読したから、哀れなマルクスの時折示すブルジョワへの称賛の念を少しばかりこじつけて解釈して居る」(126) と、グリーンは書いたのである。マルクスのブルジョワ憎悪は恐らく「愛の裏返し」なのであり、「愛したものに長らく拒絶されて来た」(126) からだと神父は指摘する。

ここに己の境遇に重ねて、「愛したものに長らく拒絶されて来た」にも拘らず敵意を向けぬ、十字架の聖ヨハネや聖フランシスの強靭な精神が好対照に暗示される。十字架の聖ヨハネは1577年、所属会派の修道士の不当な告発により監禁せられ、獄内で侮辱と虐待を受けたが、翌年8月夜陰に乗じて脱獄し、他の修道院に身を潜める。理解されぬ孤独を甘受する事になるが、それでも彼は激しい苦言を残した、曰く「自分で自分の敵になること」(東京女子跣足カルメル会54)、「辛苦を愛すること」(56)、「自分に信頼する者は、悪魔よりも悪い」(78) 等。サールの聖フランシスも大差の無い逆境に居た。浩瀚な『神愛論』を物したこの柔和な司教は、ジュネーブに於てレーニンやスターリンの如き矯激な「カルヴァンにどう対応して行けたのか」(91)、キホーテ神父には不思議で仕方がない。無論、現実の布教は困難を極めた。「石を投げられ、暗殺未遂が数度あり、狼に襲われる」命の危機にも遭遇し、「敵の策略からの出口は見当りません」(浦田 232) と、この「魔術師、ペテン師、教皇主義者など

と非難」(浦田 233) された聖人は嘆いた。

面白いのは、その崇敬する聖フランシスの言葉が、キホーテ神父に愛の不能を悟らしめる経緯だ。『神愛論』の一節が普段の様に神父を慰める所か、追及する結果となる。磁石が鉄を引き付ける結合の描写を通して、美徳への共感による愛の一致を暗示した箇所をキホーテ神父は読む。「次に続く借問が神父の心を刺し貫いた。『この生命無き石の中にも象徴せられし躍動せる愛の全体を、汝見ざりしか。』」(140) サンチョと一緒に「乙女の祈り」なる題名のポルノ映画を見て、交合する男女の律動する場面にも無邪気に大笑しただけのキホーテ神父は、「人間の愛を感じる事が出来ない」としたら、猶更「神の愛を感ずる事など不可能であるに相違ない」と悩む。情欲に煩悶する事も「誘惑される事も無い私が、どうして悪に抵抗する為に祈れるのか。その様な祈りの中に美徳は存在しない。神父は祈りのうちに全く孤独であると感じた。」(141) 『ドン・キホーテ』の原作に「第三十三　とてつもない物好きの小説が読まれる章」があり、そこには誘惑の試練を受けぬ美徳や善良に対する不信が描かれるのだが、キホーテ神父も亦、悪事を為す機会が無いから偶々善良であるに過ぎぬ己に真価を認められず苦悩する。性愛の卑俗な話題が宗教的な愛の難題へと漸次昇華して行く巧みな描写は、グリーンの腕の見せ所だ。

性の誘惑はキリスト教の伝統的主題である。『キホーテ猊下』の終盤で、トラピスト修道院の聖堂内に「茂みの中で身動きの取れない裸の男性の相当醜悪な絵画」(237) が掛けられて居るのも、その好例である。恐らく聖ベネディクトが肉欲の悪の誘惑に負けまいとして自ら激痛に身を苛む構図だ。どれ程醜悪に見えようと、克己主義の過激な苦行を無頓着や妥協より潔しとする苛烈な伝統精神の裡にキホーテ神父は生きて居る。「茨垣を裸身で潜る」なる奇異な格言は、西洋の正統思想では至当でも、緩和穏当を好む吾が日本文化には馴染み難い極端である。日本とは全く異なる『神の国』を論じた聖アウグスティヌスは、肉欲に執着して居た過去を正直に告白した「罪人であり聖人であり」、「詩人でユーモアの解る人」でもあり、「性に就いても経験から書いた」(102)。そ

のアウグスティヌスが不能に就いて説明した箇所を、キホーテ神父は「性欲を抑制する」「自然な方法」だと誤解し愛すべき無知を示す。知らずに宿泊した売春宿では、避妊具を風船と信じて膨らませて遊び、サンチョを呆れさせた一件と同断である。海千山千のサンチョにしてみれば、キホーテ神父は「異様だし、人間らしくない」(103) 不具者なのである。

尤も、この神父がドゥルシネアの様な守護の姫「マーティンと呼ばれる少女」に「守られて来た」(104) 事は確かだが、それはサンチョが期待する様な恋愛沙汰ではなく、リジュの聖テレーズの手紙に関する読書体験に過ぎない。司教に苛められた時にキホーテ神父を大いに慰めたその理由は、聖テレーズも亦、支配欲の強い修道院長に徹底的に疎まれ苛め抜かれた経験があるからなのだ。この孤独な少女は重い結核と深い宗教的懐疑心とに苦しみながら、二十四歳でこの世を去る。その狭い日常に於けるささやかな愛の実践に、キホーテ神父は心から敬愛の念を懐いて居た。それ故、毎日テレーズの言葉を噛みしめて「剣により死ぬより先に、幾度ものピンの刺し傷で死に」行かん (104) とて、日常茶飯事に小さな自己犠牲を重ねようとする。十三歳の聖テレーズの座右の銘は、十字架の聖ヨハネの「苦しむ事、そして、蔑ろにされること」（菊地 64）であり、後にマザー・テレサは彼女を守護聖人に選ぶが、両者は十字架の聖ヨハネの神秘的な「信仰の暗夜」と呼ばれる、神の存在そのものに対する抜き差しならぬ疑念を共有して居た。

キホーテ神父にも元市長のサンチョにも、それぞれの信条に対する打消し難い疑念がある。自らを不遜にも義認する信条に悩み、所属組織の圧迫的な支配に苦しみ続ける。だが、決定的な相違もあり、薬屋の娘の魅力に負けて神学校の学問を棄てたサンチョが、食欲、性欲ともに天晴れな位旺盛で生気溢れるのと比べると、うぶなキホーテ神父は、何とも柔弱なお人好しに見える。愛車ロシナンテへの愛情は有るが、肝心要の人間への愛情が湧かず、性の欲望は欠如して居て悪の誘惑にも無縁である、その事が神父を苦しめる。この神父が恐れたのは、教区司教などではなく、自己の存在意義を否定する様な不適格の烙印

に絶望する大罪だと悟るのである。

所で、サンチョが信奉するマルクス主義の疑似キリスト教的な要素を、ベルジャーエフは剔抉した。それは「光は闇を通して獲得されうる」(224)、善には悪が必要であるとの思想である。「完全な生」の実現には「闇が濃くならなければならない」とするこの思想の特徴は、殆ど十字架の聖ヨハネやアヴィラの聖テレサの「信仰の暗夜」なる神秘主義の神学を、政治的に焼き直した不気味なパロディーと評し得る。ここで『キホーテ猊下』の扉にグリーンが掲げたハムレットの台詞「良い悪いは當人の考へひとつ、どうにでもなる」を想起する事は意義がある。「當人の考へひとつ」で「どうにでもなる」なら、自己の正義が万事裁量する倨傲へと突き進むか、事の成果は人知を超えた神の摂理だから謙虚に天命に委ねるか、両者の間には天地の開きが有る。原作のドン・キホーテも「暗闇ののちに光明を待つ」(続編三 282) と説くが、これはサンチョを鞭打つ為の懲罰的な牽強付会である。ともあれ、マルクス主義とキリスト教との酷似を認識して居たベルジャーエフが論じた通り、ソヴィエト共産主義の哲学者は「『戦闘的哲学』の戦士であり、多くの点でカトリックの神学者に似て」(238) 居り、「ソヴィエト哲学の構造全体が、キリスト教のぞっとするような戯画」(244) なのだ。それ故、キホーテ神父とサンチョとは独善的支配に抵抗する「誠実」な求道者同士、猊下の襟を貸し借り出来る仲の「一種の司祭」(Greene 105) 友達になり得たのである。

グリーンは聡明なサンチョに意図と結果とを区別せしめ、両者の因果関係を否定させて居る。人間の思想信条と実践行動の結果とを峻別させ、「我々は皆、自分の意図した事の残酷なパロディーを作るのです」、と「悲しみと後悔の調子を籠めて」(222) 語らせた。善を目的に為した必要悪が、善には非ず大なる悪を齎したとしても、神ならぬ人の身に未来を見通せる筈がない。サンチョとキホーテ神父とは、共産主義の人権侵害や強制収容所と、カトリックの異端審問や精神病院収容の話題には触れない事を取り決める。トリリングが『誠実とほんもの』の中で述べた「ほんもの」なるギリシア祖語の「激烈な意

味」が想起される所だが、それは「完全な支配力を持つ」事と「殺人を犯す」(131) 事を意味するのである。キホーテ神父を精神病院に入れようとする司教は、聖パウロのテトス書第1章10節から11節の「服従せず、虚しき事を語り、人の心を惑す者おほし。・・・ 彼らの口を箝がしむべし。」(185) を引用するが、これはスターリンの粛清命令としても通用する。

「ほんもの」の真理を有すると公言する教会や共産党の組織に対する不信が、キホーテ神父と元市長のサンチョとを結び付けて居る。そして、この両組織への愛憎半ばする複雑な反応を示して、若かりし神学生サンチョに強烈な印象を残したのが、スペインの哲学者、詩人、小説家のウナムノである。ウナムノがドン・キホーテを敬愛し、その冒険を考察した事は、サンチョの指摘する通り周知の事実だが、キホーテ神父も亦、「垂れた瞼が荒々しさと個人的思考の傲慢とを表して居る」ウナムノの石像を「その名を繰り返しながら、敬意を籠めて見上げた。」(111) キリスト教徒には異教徒を、共産主義者に対してはキリスト教を称賛し相手を挑発し、「ウナムノ党が組織されたら、私が真先に『反ウナムノ派』になる」(Books: Dream Us, 2) と放言した天邪鬼であり、教条主義や党派心を何より憎んだ彼の顔は、「荒々しさと個人的思考の傲慢とを表して居る」のである。ウナムノは小説「殉教者、マヌエル・ブエノ」の中で、聖人と呼ばれ人望厚い神父が、その心底に無神論を蔵して居る二面性を描いて居り、その粗筋は、インドの底辺で真摯に奉仕を続けながらも神の存在が信じられなくなり苦悩するマザー・テレサの暗夜の人生を髣髴とさせる。この小説は1931年刊行時に醜聞となり、ウナムノの名は禁句となる。心酔するサンチョの言葉、「大勢の司祭がウナムノの死を聞いた時、安堵の溜息を洩らし、事によると教皇も彼が死んで安心した」(111) に相違ない、との発言も強ち誇張ではあるまい。風車に突撃するドン・キホーテの如く、ウナムノも教会から厄介な論敵と見做されて来た。

ウナムノの知的な青年に対する影響力の大きさと、人生に於ける懐疑の重大な意義とに着目させられる場面がある。マルクスの教条主義の上に胡坐をかい

て居る様に見えたサンチョを、キホーテ神父が「慣れない怒りに」身を任せ、お前には「絶望の尊さ」(112) が解らぬと叱りつける。その後、サンチョは「信仰心への両面価値を懐きながら、カトリック教会に留まり続けた」往時の回想を語る。夢の中でウナムノの講義の声を聞いたのである。「くぐもり声がする、信者の耳に囁く不確かさの声が。誰に解るか。この不確かさ無くして、どうして我々は生きられるのか。」(112) ここに現れる「絶望の尊さ」と「不確かさ」とは、ウナムノの思想を語る上で鍵となる言葉である。感情と合理主義、信仰と理性とは、キホーテ神父とサンチョとの対話の如く果てしない死闘を繰り返す。真理を求める長く和解の無い葛藤の「不確かさ」にウナムノは絶望的になる。けれども、それこそ「知性の最も高貴で、最も深淵で、最も人間らしい、肥沃な状態」(Books: Dream Us, 1) だと主張する。ウナムノは調和や妥協の「不毛な安定性」を憎み、「心と頭が和平を結ぶのを望」まず、「内的な矛盾」の原理に支配された人生を格闘し続け、「闘争に魅せられると同時に、静寂と平和を渇望し」(マシア 118) た。

切実に真理を求めるウナムノの不撓不屈の精神には圧倒されるが、この誠実に葛藤し続ける精神は、十字架の聖ヨハネやアヴィラの聖テレサの神秘主義に根差し、イエズス会を創始した元軍人の聖イグナチオ・ロヨラが反宗教改革の礎にした合理主義にも由来する。異端と評されたウナムノの剛直な探求心の源泉は、原作のドン・キホーテに劣らず聖イグナチオや聖テレサも愛読した騎士物語を介して、酷い弾圧を身内から受けた聖人達の剛毅な精神にまで遡る。ウナムノは聖テレサを称賛して書いた、「我々は魂を残す。どんな組織であれ、どんな『純粋理性批判』であれ、サンタ・テレサに勝るものはない。」(パソス 231) と。

十字架の聖ヨハネは、無味乾燥と暗黒と沈黙の内に放置されても忍耐する事が霊魂を浄化する道だと確信して居たから、不愉快を求めよと助言し、自ら実践した。「死んでもよい、負けてはなりません」(ルノー 21) と書き残した聖テレサは、猛抗議にも負けず十七もの修道院を創設し、「死か生か」、「闘争か

平和か」、「地獄か天国か」（アビラ 329-330）全てを甘受すると神に切願した。聖テレサは幼少期に騎士物語を耽読した挙句、七歳にして殉教を志し、聖イグナチオが修練法を記した『霊操』を読んで居た。その聖イグナチオにしても、『キホーテ猊下』の序盤にキホーテ神父に出立を勧める司教が述べた様に、「大勢の人が狂人と呼んで居た」(24) のである。吉田小五郎の略伝に依れば、「鐵石の意志と、深く人の胸に食ひ入る魅力と、我が身を忘れて人のために盡す誠意とがよく人の心を射た」(391) イグナチオだが、「彼の言動は疑の目を以て見られ、宗教裁判所の忌憚にふれて三度まで投獄されたほどであつた」(388)。「彼は迫害を受けたが、所謂『ドン・キホーテ』的の情熱でよく耐へた」(392) と語られる。「價値無き愚者と見られたキリスト」（イエズス会 76）の如くならんと望むイグナチオは、「キリストの弟子たる者は迫害を受ける」（イエズス会 238）べしと覚悟を決めて居た。トマス・ア・ケンピスの『キリストの模倣』が彼の愛読書である。

かくして共に狂人と見做された、先祖のドン・キホーテと聖イグナチオとに触発されたかの様にキホーテ神父は旅に出て、ウナムノの弟子を自負するサンチョと寝食を共にし、最後にはトラピスト修道院でデカルト信奉者のレオポルド神父と、聖イグナチオの研究者とに見守られながら、無意識にミサを捧げ死んで行く。デカルトと聞けば、聖イグナチオの起したイエズス会との反目が有名だが、その合理主義の学問の基礎はイエズス会の学院にて修得されたものである。デカルトの『省察』に語られる、疑問の余地ある一切を排除して行く方法は、「聖イグナチオが『霊操』中で導いたのと何か似た方法で」(Sorrel 57) 為されたとの指摘がある。異論もあるが、「方法的懐疑」を実践する段階が「霊操のはじめにある全ての愛着を除去する」「行為の実践」（下野 150）だと解する学者も居る。田中仁彦は、デカルトの懐疑の手法を「『暗夜を一人行く』がごとき手探り」(326) と評した。この信仰と理性との近接を考慮すれば、デカルト流の合理主義から信仰の道へと「飛躍」したレオポルド神父の改心の道程も不思議ではない。現実世界には、現象学のフッサールの高弟で気鋭の学者

エディット・シュタインが、アヴィラの聖テレサの伝記に感銘を受け、父祖伝来のユダヤ教からカトリックに改宗し修道女となり、アウシュビッツで殉教した事例がある。理性対感情、合理主義対信仰の単純化した二項対立は、安易な偏見に過ぎぬ事が解る。

この辺で、『キホーテ猊下』に登場する重要な聖人や哲学者の時代的な繋がりをまとめておく。4世紀のアウグスティヌスは別格として、聖イグナチオは16世紀前半に活躍し、少し後にアヴィラの聖テレサと十字架の聖ヨハネが続く。『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスは、十字架の聖ヨハネとほぼ同時代人である。16世紀後半から17世紀の二十年間、聖テレサを仰ぎ見たサールの聖フランシスが活動した。この穏和な聖人より三十歳位若い天才がデカルトである。聖アントニオ・マリア・クラレットは19世紀に召命を受けて働き、最後の四半世紀に入れ替る様に、リジュの聖テレーズが二十四年の短い生涯を燃え尽した。哲学者ウナムノの人生は、その聖アントニオの晩年と聖テレーズの一生と重なり、スペイン内戦の始まる頃までであり、その勝者フランコは、アヴィラの聖テレサの聖遺物である薬指を死ぬ迄、「満腔の崇敬を以て、机の上に保管し」(Greene 89)、20世紀の四分の三を生き延びた。そして、この大元帥の同時代人に、聖テレサに霊感を受けたエディット・シュタイン（十字架の聖テレサ）が居り、ナチスに殺害された。20世紀の半ば以降、マザー・テレサが登場し、その慈善事業の活躍をマゲッリッジらに報道され、死後には神への懐疑的な書簡が公表されて世紀末に大きな注目を集める事になる。これら聖人や哲学者の間の、著作を介した人格的な影響関係の系譜に、グリーンの『キホーテ猊下』は立脚して居る訳である。

現代の我々には、デカルトの合理主義や個人主義ばかりが目を引く。堅固な個人主義の所為で、彼は神の恩寵よりも自由意志を重んじた異端の如く評された。けれども、小林秀雄が見事に述べた様に、「これほどよく自分を信じて、よくもこれほど自己満足からも、自己欺瞞からも遠ざかる事が出來たものだ」とその稀有な美質に瞠目し、その「自己を信じて無私を得た生きた人間」

(342) に賛嘆すべきではないか。デカルトは、「ほんもの」の真理を摑んだと確信した者の陥りがちな独善を免れた「誠実」な人である。グリーンは作中に、デカルトが「盲人向きの治療法を見つける為に眼鏡の改善に取り組んだり、肢体の不自由な者を助ける為に車椅子を手掛けたりする現実的な人」(236) たる事を忘れずに書いた。

そして、左様なデカルトに心酔した、『キホーテ猊下』中のレオポルド神父なればこそ、キホーテ神父の辛い懐疑の意義も苦しみも理解出来たのである。興味深い縁だが、この神父最期のミサを見守るのは、デカルト信奉者のレオポルド神父と、デカルトの合理主義を批判して感情を重視したウナムノの弟子サンチョと、デカルトが研鑽を積んだ学院の創始者たる聖イグナチオを研究する学者である。これを理想主義の騎士ドン・キホーテに準じて形容すれば、ドン・キホーテの懐疑的な末裔を取り囲むのは、知性の先駆者と、感情の闘士と、信仰の兵士との、各々の分野に於ける不才の後進に他ならない。この感情の闘士の不肖の弟子は、知性と信仰との間を激しく揺れ動き、主役の懐疑的なドン・キホーテの子孫と次第に一心同体化して行く。教会と世間から見れば、窃盗と騒乱の罪で追跡された逃亡中の精神障害の神父が、自損事故の果てに錯乱状態で不名誉な頓死を遂げたに過ぎない。然し、文字通り生命を賭した友愛の実践と必死の応諾とは、主人公の神父の心に平安を齎し、残された従者には大きな不安と疑問とを抱かせる結果となる。放蕩息子の様にサンチョが帰教するか否かは解らない。現実のマゲッリッジは、マザー・テレサの TV 取材の後、不思議な影響を受けてカトリックに改宗したのだが。

キホーテ神父の生と死は、ドン・キホーテの生涯を、敷衍すればキリストの生と死をなぞる様に進行する。換言すれば、それは祖先からの肉体の源泉と信仰の精神的な原点とを、実生活の中で模倣し再現する行程である。原典のキホーテが最期に騎士物語を棄てて正統信仰に戻る結末とは逆に、キホーテ神父は臨終の床で、己の騎士物語たる福音書や諸聖人の著作を放棄するかも知れぬ (140) 事を恐れる。元市長のサンチョは、痛飲した神父が自己の信仰の正統性

に疑問を懐いて居ると告げたのを聞いて夢の中で、十字架上のキリストよろしくこの友人が「祭壇の一番上に聖像の如く留められて居り、会衆が嘲笑し、キホーテ神父が泣いて居る」(164) 様子を見る。愛する事を否定された空虚な生と、限りなく絶望に近付く悲惨な死とを再現する事が、この神父の使命となる。キホーテ神父は、「宗教裁判所の迫害者」(207) トルケマダの如き司教からミサの司式も告解の聴聞も禁じられ、精神的な「死刑宣告」(208) を受けて居た。ミサの山場、最後の晩餐の変容（化体）の神秘も、もう再現出来ぬ。覚悟を決めた神父は、マリア像の山車に張り付けられた数多の紙幣を見るや、あれ程嫌悪した猊下の称号を名乗り、拝金主義の強欲と対決する。マリアの苦悩が「金集めの為」、「司祭を裕福にする為」(227) であるかの如きお祭り騒ぎに対し、心底から憤怒が込み上げ、神殿を汚す両替商を叩き出すキリストの狼藉をなぞるのである。

マゲッリッジは『イエス―今に生きる人』なる評伝の中で、キリストとドン・キホーテとの類似性を強調した。前者が旧約の「預言に記された手順をすべて」為し「作法」通りに行動したのと同じく、後者は「騎士の修行をすべてやりとげ、騎士の鑑」(143) たるに相応しい冒険に臨む。だが、共に本物のメシアや騎士の「奇怪なパロディー」と見做され、「危険な狂人」(144) と呼ばれる。牛島信明はドン・キホーテとキリストとを比較して、「両者が共に《言葉》から生れた存在であり、さらにすでに《書かれて在る》ことを実現するための存在」(1) たる事を力説し、高橋英夫の『花から花へ』の明察、「人間の行動、思考、表現は」、「既に存在したものの再発、継続なのではないか」(2) を効果的に引用した。歴史上のドン・キホーテ観では、「滑稽なキホーテ」、「天晴れなキホーテ」からロマン主義の英雄的キホーテ像へ移り、近代以降、「象徴的なキホーテ」の中にドストエフスキーが探求した様な「新たなキリストの如き人物」「聖なるキホーテ」(Pardo 36) が登場する。グリーンの『キホーテ猊下』はこの系譜に連なり、死者の言動の絶大な影響下に、生者が模倣と再現を試みる。その意味では、キホーテ神父の亡くなる12世紀の修道院が、「過去

の文明の廃墟の中に我が家を建てようと、今努力して居る冒険家の小集団により、漸く最近入植された島」と形容され、夜の闇に浮かび上る過去の教皇や騎士達の木像が「悲しい記憶の様に」「生の風采を帯びる」(233) と描写されるのは、死者と生者との濃密な関係を明示して居て興味深い。始めにキホーテ神父を昇進させ出立を急かす司教が詠む催促の詩句、「去年の古巣に今年は鳥の居らぬもの」(24)（続編三 339）に関しても、未来志向の挑戦の期待より寧ろ、過去への愛惜の情を反語的に表した詠嘆に感じられてならない。

『キホーテ猊下』の後半は、特に死と懐古との象徴に満ちて居る。フランコ総統の大霊廟にウナムノの小さな箱の墓、事故死したらしい視学官の「古代ケルト十字架の様に見える」(232) 碑石。愛しい模範を過去に求め、死者を今に生かさんとする様々な想起方法がある、その西欧精神の血脈は偉観だ。作中に出たサン・アントニオ・デ・ラ・フロリダ聖堂 (73) には、ゴヤの描いたパドアの「聖アントニオの奇蹟」の天井画がある。己を見つけようと生涯苦闘した、この失せ物の見出しを祈るべき聖人は、父の無実を証すべく、殺された死者を正に復活させる。けれども、周囲の群衆は「奇跡に気づかない」大騒ぎの狂態を曝し、「敵意をむきだしにして」（シモンズ 197）愚弄する輩すら見える。キリストからドン・キホーテを経てキホーテ神父、マザー・テレサに迄至る、愛と死との真似びの不可思議を賢しらに嘲笑する合理主義者や、死者の懐想と模倣とによる再現の継承に無関心な大衆を、グリーンはゴヤの様に醒めた目で見て居たのかも知れない。

引用文献

“Books: Dream Us, O Lord.” *TIME*. Jan. 17, 1964.

Eliot, T. S. “The *PENSEES* of Pascal.” *Selected Prose*. Edited by John Hayward, Penguin Books, 1955.

Greene, Graham. *Monsignor Quixote*. Penguin Books, 1983.

Orwell, George. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*

Volume 1. Penguin Books, 1982.

——. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 2*. Penguin Books, 1984.

——. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 3*. Penguin Books, 1970.

——. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 4*. Penguin Books, 1984.

Pardo, Pedro Javier. "Don Quixote in Great Britain." *Don Quixote around the Globe: Perceptions and Interpretations*. Edited by Slav N. Gratchev and Howard Mancing, Juan de la Cuesta, Academia, 2020. pp.21-56.

Sorrel, Tom. *Descartes A Very Short Introduction*. Oxford UP, 2000.

Trilling, Lionel. *Sincerity and Authenticity*. Harvard UP, 1973.

Van Biema, David. "Mother Teresa's Crisis of Faith." *TIME*, Aug. 23, 2007.

アビラの聖テレサ『神の憐れみの人生　下』、鈴木宜明監修、高橋テレサ訳、聖母の騎士社、2006年。

イエズス会日本管区　ロゲンドルフ、ヨゼフ編『イエズス會』、エンデルレ書店、1958年。

牛島信明「引用もしくは模倣のポエティックス―『ドン・キホーテ』と聖書の場合」、『東京外国語大学論集』第60号、2000年。

浦田慎次郎『フランシスコ・サレジオと共に歩む　神への道のり』、ドン・ボスコ新書、2013年。

菊地多嘉子『人と思想125 リジュのテレーズ』、清水書院、1998年。

小林秀雄「常識について」『新訂　小林秀雄全集　第九巻　私の人生觀』、新潮社、1984。

シェイクスピア、ウィリアム『ハムレット　シェイクスピア全集10』、福田恆存譯、新潮社、1962年。

下野葉月 “Mathew L. Jones, *The Good Life in the Scientific Revolution: Descartes, Pascal, Leibniz, and the Cultivation of Virtue*.”『東京大学宗教学年報』26、2009年。pp.147-154.

シモンズ、サラ『岩波　世界の美術　ゴヤ』、大高保二郎・松原典子訳、岩波書店、2001年。

田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢－『方法序説』を読む－』、岩波書店、2014年。

デ・セルバンテス、ミゲル『ドン・キホーテ』[続編二]、永田寛定訳、岩波文庫、1988年。

――.『ドン・キホーテ』[続編三]、高橋正武訳、岩波文庫、1988年。

東京女子跣足カルメル会『十字架の聖ヨハネ　小品集』、ドン・ボスコ社、1991年。

日本聖書協会『舊新約聖書　引照附』、1982年。

パソス、フアン・ホセ・ロペス「『ドン・キホーテ』と現代スペイン哲学－『ドン・キホーテ』の哲学的意義について」、『ドン・キホーテの世界』、坂東省次、山崎信三、片倉充造編著、論創社、2015年。

ベルジャーエフ、ニコライ『ベルジャーエフ著作集Ⅷ　共産主義とキリスト教』、峠尚武訳、行路社、1991年。

マゲッリッジ、マルコム『マザーテレサ　すばらしいことを神さまのために』、沢田和夫訳、女子パウロ会、1979年。

――.マザー・テレサ出演『すばらしいことを神さまのために－Something Beautiful for God－』ピーター・シェファー監督、BBC、1969年。女子パウロ会、2010年、DVD。

――.『イエス－今に生きる人』、西村徹訳、新教出版社、1977年。

マシア、ホアン『ドン・キホーテの死生観　スペインの思想家ミゲル・デ・ウナムーノ』、教友社、2003年。

吉田小五郎「聖イグナチオ・ロヨラ」、『史学』19巻3号、三田史学会、1940

年。pp. 1-19.
ルノー、エマニュエル『アヴィラの聖テレサ　神秘的体験の証人』、前田和子訳、中央出版社、1983年。
ロベール、マルト『古きものと新しきもの　ドン・キホーテからカフカへ』、城山良彦他訳、法政大学出版、1973年。

The consanguinity of Western traditional faith －Graham Greene's *Monsignor Quixote*－

Kazuyasu Hiramatsu

Graham Greene is a dialectic skeptic who seems to be at once a reactionary Catholic and a moderate Communist as G. Orwell said in his letter. His complex characteristic is impressively revealed in the humorous adventure novel *Monsignor Quixote* in his later years. The main heroes based on the original novel written by Cervantes are the direct descendants of Don Quixote, a rural Catholic priest and Sancho, a Communist ex-mayor. Their journeys and funny conversation are as thrilling and moving as those of the original story because of the hatred between Catholicism and Marxism and because of their affinity of skepticism toward their own faiths. As to the growing friendship, Lionel Trilling's criticism *Sincerity and Authenticity* is a great guide to understand their 'sincere' attitudes to each other and the oppressors' psychology with 'authentic' dogmas.

However, to look below the surface of its polemic dialogue, it is easy to read the subject matter of Western traditional philosophy of love and death from Christ through Don Quixote to Mother Teresa of Calcutta. Father Quixote is to Communist Sancho what Mother Teresa is to ex-Communist famous journalist, Malcolm Muggeridge. We can easily trace the skeptical lineage of Christian mystics and Cartesian rationalists against the stern orthodoxy in his story and modern history: St. Augustine, St. Ignatius

Loyola, St. Teresa of Avila, St. John of the Cross, Miguel de Cervantes, St. Francis de Sales, Rene Descartes, St. Antonio Maria Claret, St. Therese of Lisieux, Miguel de Unamuno, General Franco, Edith Stein, Mother Teresa, and Malcolm Muggeridge. As the latter half of this novel is filled with images of memories of death, the most important concern to Greene seems to recollect and revive the close relationship between the dead and the living.

Some critics point out that Christ and Don Quixote were the equivalent characters in realizing what had been written in such holy books as the Old Testament and the chivalry novels. All saints and philosophers in *Monsignor Quixote* followed in spite of their tragic fate the ridiculed and tortured predecessors by recollecting their wills and imitating the brave deeds.

In San Antonio de la Florida suggested by Sancho, there is a vault painting, "St. Anthony (of Padua)'s miracle" painted by Goya. With a view to showing his father's innocence, this saint revives a murdered man. But the large crowd around him are ignoring with chatter or detesting him jeeringly. With Goya's eyes Greene looks cynically upon the rationalists and the nonchalant as foolish and heartless in his Quixotic novel about the modern serious doubts.